

『氷上スポーツ研究』“オピニオン”投稿要領

- 字数：800字以内

- 資格：当学会個人正会員・個人賛助会員

- 内容について：氷上スポーツに関するものであれば基本的には内容を問いません。

例としては、競技の発展に向けた提言、設備等の環境整備に向けた意見、コロナ禍における選手等への声援、当学会への要望などが挙げられますが、基本的には自由となります。ただし、他者、他団体を中傷するような内容、著作権侵害にあたる可能性があるようなものは掲載できません。

※なお、学会誌編集委員会により、掲載の可否を判断させていただきます。

また、学会誌編集委員会より文章の修正をお願いする場合があります。

- 募集期間：随時

受付時期によって、年間2回発行のどちらかの学会誌に掲載させていただきます。

(1号：10月末/2号：3月末)

- 原稿宛先： [toukou@jasiss.jp](mailto:toukou@jasiss.jp) 「学会誌編集委員会」まで添付ファイルにてお送りください。

及び  
投稿上  
の留意点

※ PDF ファイルには変換せずに、ワード等におけるテキスト文書そのまま提出ください。

※ 原稿には投稿者さまのフルネームと所属先等も一緒に記載ください。

※ 内容に関係する画像がある場合は、文書に貼り付けていただくか、別添で送っていただいてもかまいません。

※ 投稿者さまの掲載用顔写真データも、一緒に送付いただければ幸いです。

(必須ではございません。掲載にご同意いただける場合は是非お願いします)

参考として、次ページ以降の過去の「オピニオン」掲載文をご覧ください

【オピニオン】

## オピニオン

## フィギュアスケートアイスダンスの未来

只野 明日香 (RAY (フリーランス))

2019年夏、フィギュアスケートのアイスダンスの選手と話をすることがあった。フィギュアスケートといえば現在国内では選手が一人でジャンプやスピンを繰り返す「シングル」が主流で「アイスダンス」と言われても、ピンとこない人も多いかもしれない。

アイスダンスは男女二人ペアで行う競技でステップやリフトなどがとても美しい競技だ。二人であるがゆえに、事情も二人分になる。

どちらかの事情により続けていくことが困難になる現状（ペアの解消）は、特に日本においては海外よりも多く、深刻である。

成長するに従い男女のバランス（身長差）が出てきてしまったり、ペア間でのモチベーションのズレ、環境の差（金銭的な差、経験値、拠点の国内外の希望、学業の優先など）も大きく影響してくる。

たくさんの壁を乗り越えて今日まで来て、日本でのアイスダンスの認知度はとても低い。とても素敵な競技なのに、もう少し認知度をあげることができないのだろうか？と失礼ながら今後のアイスダンス普及について伺った。

「まず競技人口が少なく、やりたいと思ってくれる人が少ないんです。そして必然的に限られた練習場所もシングルの選手が優先になるし、二人の選手、コーチ、練習場所のスケジュールを合わせることもとても難しい。

一人と一人が足し算ではなくて、掛け算になる魅力があるんですけどね。ルールも難しいし中々テレビなどのメディアで取り上げてもらうこともできないんです。」そう話していた約1年後、思いもよらなかった形でアイスダンスは脚光を浴びることになった。

レジェンド高橋大輔さんのアイスダンス転向だ。

この発表により、多くのメディアがアイスダンスにスポットを当て始めた。あの時話していた未来が、大きく動き出したのだ。これからの日本アイスダンス界の選手たちが、切磋琢磨し発展していく扉がつかいに開いた。彼らの氷上以外でのドラマとともに、アイスダンスの世界を堪能して欲しい。



## 指導者の役割についての考察

坂井 寿如 (株式会社アシスト 代表取締役)

近年、アスリートの成長は目覚ましく、それをサポートする指導者に求められる能力は高度化し多様化している。指導者が日々行うコーチングにおいて直面する問題の多くは、個別的で、複合的で、再現性が乏しい(村木, 1990)と言われ、コーチには、因果関係が複雑に絡み合ういくつかの選択肢の中から、限られた時間の中で、「正解」と事前に断定できない1つを選択し、実行していく「不確かさの中での素早い意思決定」が迫られる。コーチング活動は、このように、きわめて高度な創造的な能力が要求される実践的・包括的な活動である(會田・船木, 2011)と言われている。また、現場のコーチを支える、このような知は実践知と呼ばれ、個人的、経験的な知識、柔軟で不定形な知識である(ベナー, 2004)とも言われ個人差が大きいことが示唆されている。

スポーツ活動はライフスキル能力の獲得に効果があるとの見方が概ね支持されてきた(杉山ほか, 2008) スポーツ経験はライフスキルに正の影響を与えていることが示されており、獲得の程度は指導者の適切な働きかけが影響するとも報告されている(上野・中込, 1998)。また、中室(2015)は、「スポーツは勝利やパフォーマンスの向上といった個人やチームの目標に向けて、仲間と協調することでやり抜く力が獲得できたり、怪我をしたりと葛藤を経験することがあるだろう。こうした非認知能力やライフスキルを効果的に引き出すには、その環境を作り出すことのできる指導者の存在が重要である」と指摘している。

このように指導者には競技力と直接つながらない選手の人間的な成長にも取り組む期待が寄せられている。

ほぼ、全ての指導者が求めているのは選手の人間成長で、技術的、戦術的な指導をする前に選手の心理社会的能力のライフスキル・非認知能力の向上を挙げ、人間成長が競技力の向上につながると考えている。

そこでは知識を身につけ自身で考え答えを見つける行動が求められ、指導者は選手をサポートし選手の行動を導くことがもたらされる。

\* 會田宏・船木浩斗(2011)ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究：大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに。コーチング学研究, 24(2): 107-118.

\* 村木征人(1991)スポーツ科学における事例研究の意義と役割—コーチング理論と実際の乖離撞着を避けるために—。スポーツ運動学研究, 4: 129-136.

\* 上野好平・中込四郎(1998)運動部活動への参加による生徒のライフスキル獲得に関する研究。体育学研究, 43: 33-42



## コロナ禍におけるそり競技の新たな取り組み

小口貴久（日本ボブスレー・リュージュ・スケルトン連盟 医・科学委員）

オリンピックのそり競技には、ボブスレー、リュージュ、スケルトンの3競技があり、それぞれ使用するそりやスタート方法は異なるが同じコースを滑走する。現在、国際連盟公認コースは世界各国に15か所ほどあり、北京2022大会に向けて建設された中国の延慶(Yanqing)が最も新しいコースとなる。日本では、札幌1972大会時に初めてコースが建設され、長野1988大会では、当時、世界初となる2か所の上り勾配を持った人工凍結コースが建設された。

そり競技のコースは屋外にあるため、気温や降雪などの影響を受けやすく、その整氷には多大なる費用がかかる。そのため、日本国内で唯一の国際連盟公認コースであった長野市ボブスレー・リュージュパークも2018年2月限りで休止となり、現在、日本国内において氷上滑走練習ができない状況が続いている。さらに2020-2021シーズン(令和2年度)は、今なおその影響が続いている新型コロナウイルス感染症により、すべての海外遠征はすべてキャンセルとなり日本選手にとっては1度も氷上滑走をすることなく冬季シーズンが幕を閉じた。

そのような中でも国内において何ができるのか、これまで以上に新たな試みが行われたシーズンであった。国内合宿はこれまでの倍以上実施され、目的に合わせて北海道や宮城、千葉、愛媛、沖縄など様々な地が活用された。ボブスレーでは、レーシングカートを用いたトレーニングを実施し、様々なコースを理解する力や、身体に遠心力などの負荷を感じながら最短軌道を狙う操作技術など、ボブスレーのパイロットスキル向上が図られた。スケルトンおよびリュージュでは、アイスリンクでのスタート練習が行われ、氷の感触をつかむとともにスタート技術の改善がなされた。

300日を切った北京2022大会に向けて、まずは2021年11月から始まる国際大会において出場枠を獲得することが目標となる。1つでも多くの出場枠を獲得できるよう、更なる支援に努めたい。

